

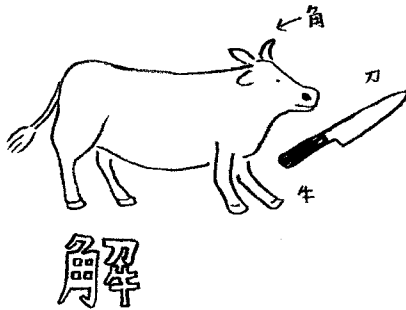
## 牛よ、安らかに

いきなりだが「解」という字。ノ角」とノ刀」とノ牛」の字から成り、牛を刀でバラバラにするという意味である。牛をバラバラにすることが「解」という字になるほどだから、昔は牛を解体することがいかに大仕事だったか。その辺のところに遠く思いを馳せていただきたいのが、「解」の字の講釈を試みた狙い。それを歴史的事実によつて証明しようというわけである。

仏教思想の影響で、千年以上にわたり四つ足（獣肉）を食べることをタブーとされていた日本人も、幕末、アメリカ人やヨーロッパ人の相次ぐ来航により、徳川三百年の鎖国を守り通すことが不可能になった。

肉食も同様で、日本にやってきた欧米人の要求を満たすため、横浜や長崎などでは彼らのために牛や豚を解体する必要が生じ、慶応四年（一八六八）五月には、各国領事の要求により、横浜の中区に初めて日本政府による食肉処理場が設けられた。

これより先、江戸に中川嘉兵衛という男がいて、安政の開国で品川の東禅寺



境内にできたイギリス公使館の求めにより、牛肉を納入することになったが、当時、江戸では牛肉を売るところはなく、毎日、横浜まで使いを出し、往復六十キロを歩いて買いにやらせる始末。

このため嘉兵衛は、これではたまらぬと、自分で解体することを考えたが、牛を解体するというと、だれも土地を貸してくれない。ようやく親戚の堀越藤吉という男の好意で今の港区白金今里町に土地を借りられたのが慶応二年（一八六六）のことだった。

さて、初めて牛を解体した日の模様は、まず空地の四方に竹の矢来（囲いの一種）を立て、締め縄を張り、「御幣」をさして、掛け矢で一撃して牛を解体したという。肉の取り方も、骨の間の肉まで削り取るような器用なまねはできず、背中あたりの上肉だけを取り、残りはそっくり埋めてしまった。

その後、牛が化けて出るといけないからと坊さんをお経を呼んでねんごろにお経を読んでもらった。